

「多言語使用」から「境界」の言語学へ

－「国際」と「国内」のはざままで－

山下里香(関東学院大学)

1. 受賞論文の概要

「モスク教室における在日パキスタン人児童のコードスイッチング」(2014年9月)は、特集号「多言語社会日本の言語接触に関する実証研究」に投稿し、徳川宗賢賞(萌芽賞)を受賞した。内容としては、日本語も流ちょうな在日パキスタン人児童が、自分たちの世代と上の世代との差異を確認し強めながら、世代間の会話の資源としてウルドゥー語、英語、日本語の接触変種への切り替え(コードスイッチング、以下CS)を行っている例を挙げ、談話の調整などが行われていることを示した。CSを通じた相手や場面、談話の調整は、先行研究で言及されている(Gumperz, 1984; ナカミズ, 2003)が、在日パキスタン人児童にもみられたのである。また、他の国内移民コミュニティ、在日コリア系学校の質問紙調査では、年長者に対する意識が継承語の選択に影響を与えている(生越 2005)が、本研究では、同じく年長者を大事にする価値観が強い社会で、継承語選択と世代間の関係がより複雑に関わっていることを談話の分析から示した。

2. 当該分野の課題

CS現象はCSが許容される場面や相手との間でしか見られず、ゆえにデータがなかなか得られない。その上、言語の種類、言語の社会的地位、使用頻度・領域、話者の態度や言語使用歴、人間関係など、ミクロとマクロの両方で様々な変数が存在する。そのため、他のコミュニティのデータでも普遍的にみられる現象はかなりゆるやかに定義することになり、初めて見るような例は特殊例のように見え、一般化して普遍的な理論を構築することがなかなか難しい。国外でも研究者がそれほど多くない中、国内ならなおさら、日本語とのCSの貴重なデータとして、研究はますます記述が中心になってしまう。特集号発行の1年半後、博士論文が書籍化されたが(山下, 2016)、これも記述が中心になっている。日本語で書かれたCSの実例の豊富なモノグラフという点では随一だが、これで私が満足したわけではない。記述を超えて、言語変異と社会の関係のパターンとその仕組みを追求したいと考えている。

ここまで「当該分野」を明確にしてこなかったが、CS現象を社会言語学のどこに位置づけるか、つまり何を「当該分野」とするかは、研究者によってまちまちである。言語獲得、言語とアイデンティティ、ポライトネス、語用論、言語類型論、会話分析、変異理論など、様々な分野がある。一方で、社会と多言語使用に関心がある研究者にとっては、CS自体に焦点を当てて研究すること自体が時代遅れと思われるだろう。

CS研究のピークであった1980-90年代以後、欧州では、加速した人とモノと情報の移動と言語の関わりを模索するのに、polylingual languaging や plurilingualism, superdiversity といった新たな概念をも交えながら抽象的な理論と政策、エスノグラフィーによる実態を交えて議論を進める、linguistic ethnography(LE)という分野が生まれた。LEはバイリンガリズムに対する教育社会学的視点やエンパワメント、リテラシーへの目配りといった点が私には刺激になった。しかし、問題意識の根本は言語使用の多様性のメカニズムの追求といった社会言語学的なものより、応用教育学的なところにあったところが、どちらかといえば前者寄りの私にはもどかしかった。日本の制度や社会構造の異なる欧米で現在議論されている問題は興味深かったが、議論の蓄積の少ない日本で、また私の研究したような公的制度外の多言語使用から問題提起を行い、主張を構築するのには、困難を感じた。欧米の多言語使用研究の分野において日本から新たな知見を生み出すには、データの収集、分析が常に不足しているだけでなく、国内で問題意識の共有や、理論を構築する背景、思想、立脚点の確立が追い付いていないという課題がある。

一方で、国内の学术界内外において、バイリンガリズムに対する偏見の是正や、知識の更新が要請されていることを実感している。バイリンガリズムは、単なる二言語の知識を自由に運用できることではなく、その言語や個人・集団の社会的環境により、その意味合いが大きく異なり、一般化は容易ではない。現時点では、なかなか多言語使用の様々な要因や現象をかみ砕いて説明する媒体や担当する講義科目をもたないが、今後そのような形のコミュニケーションにも携わっていきたい。

3. 受賞・博士課程修了後の展開

博士課程在籍中は先述のLEに関心を持ち、ロンドン大学の多言語使用研究のセミナーにも一年間参加した。しかし、様々な国際学会を渡り歩いているうちに、米国の言語人類学のアプローチに関心をもった。ポストドク時代から、その理論の勉強を続けている。言語人類学の魅力は、当該社会ないし人間関係のシステムやイデオロギーと、言語のみならずジェスチャーや非言語まで含む相互行為の細かい現象の関連を探求するところにある。

私がフィールドでデータを収集した時期は、ちょうど在日パキスタン人バイリンガル児童のみが会話する状況があった。しかし、その後は、児童や教員の構成の変動により、同じようなデータがとれなくなったため、研究は継続していない。一方で、在日パキスタン人や日本に暮らすムスリムの意味世界、ムスリムを取り巻く言説に関しては、アンテナを張っている。彼らの教育戦略や社会化にも関心があり、関連フィールドに足を運ぶ。

言語的側面からいえば、特定の社会的カテゴリーと関連するスタイルシフトないしスタイルの混用に関心があるので、在日パキスタン人以外の現象も研究している。例えば、ルー語や、タメロで話すローラ、また地下アイドルやゲームキャラによるスタイルといったテーマで学会発表を行った。また、日本の多言語使用の実態を国外にも発信する機会も恵まれたが(Heinrich & Yamashita, 2017)、自分が今後研究を進めるのに、欧米で議論が深まっている理論に寄与するのか、国外の「日本研究」の中で発展させるのか、日本で生み出したものを英語化していくのか、方向性を模索している。最近では、アジア圏の多言語使用研究者との交流を通して、問題意識を共有し研究を進めていきたいと考えている。

4. 本学会に期待すること

まず、海外からの発表を増やすだけでなく、海外の関連学会との共同開催など、本学会が持続的な学術交流の場になればより魅力的だと思う。例えば、日本南アジア学会では、海外研究者の個人発表および国際共同パネル発表が行われ(大会の25~35%ほどは英語による発表)、査読付き学会誌を日本語と英語でそれぞれ刊行する。日本の社会言語科学は、南アジア学ほど英語がリンガ franca となっていないし、ならなくてもよいかもしれないため、南アジア学会のような日英バイリンガル語化を目指さずとも、研究大会での募集型国際共同パネル発表は奨励されてもよいのではないかなと思う。

こうした国際化のほか、国内の研究者同士がより充実した議論のできる学会や大会であればと思う。社会言語科学会は、日本社会でのウェルフェアにつながる言語に関する言説や価値観の構築、問題意識とそれに立ち向か

うための学術的基盤の構築に携われると考える。そのためには、日本社会ないし国内学術界の、人間観、言語観、倫理観につながるシンポジウムないし意見交換の場があればいいと思う。

これまで大会では様々なシンポジウムやワークショップが行われ、登壇者と来場者の活発な議論が強調されているが、長い登壇者の講演や研究発表に加え、登壇者と来場者のパワーバランスから、十分に議論ができていないようにも思われる。議論のあり方の工夫のほか、ベテラン研究者や招待された研究者のみならず、査読付きで若手等にもシンポジウム企画を持ち込める場を作ったり、大会外の各種研究シンポジウムを、社会言語科学会共催ないし後援としたりするのはどうだろうか。

また、コミュニケーションやその不平等に関する研究にも関心が高いはずの学会にも関わらず、年長でキャリアのある研究者と若手研究者が必ずしも対等で自由に議論に参加できているといえないのではないかなと感じることが時にある。発表者にアドバイスをした際、私の直後に発言したベテラン研究者に、私の発言を「それはおかしな考え方」と特に理由を提示せず議論ではない形で否定されたことがある。また、研究発表の質疑応答の場で、発表者の能力や人格を否定するような発言を目の当たりにしたことがある。大学でのハラスメントが社会問題になる中、キャリアのある研究者による、若手研究者を侮辱したり軽視したりする発言に対し、許容できないという大会ポリシーを掲げるのはどうだろうか。大会内で該当する発言があった場合、研究セッションの司会や、その場にいた会員が第三者として報告し、発言者とその発言を受けた人に連絡がいくような形で加害・被害を調整し、大会外でのハラスメントの報告・相談ができる窓口があればいいのではないかなと思う。

最後に、ウェルフェアリングイスティックスに関する話題の一般向けの情報発信(ニュースレター、ブログ等)、および会員によるメディア記事・書籍・研究の紹介を媒介する学会メディアの構築も、若手を含め学会全体の研究のモチベーションの向上や学会内外の交流への推進に役立つのではないかなと思う。

参考文献

- ナカミズエレン(2003). コード切り替えを引き起こすのは何か. 言語 32(6), 53-61.
- Gumperz, J.J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge Univ. Press.
- 山下里香 (2016). 在日パキスタン人児童の多言語使用 ひつじ書房
- 生越直樹 (2005). 在日コリアンの言語意識とその変化—ある民族学校でのアンケート調査結果から— 真田信治・生越直樹・任榮哲(編) 在日コリアンの言語相 和泉選書 pp. 11-52.
- Heinrich, P., & Yamashita, R. (2017). Tokyo. In: Snakman, D. & Heinrich, P. (eds) *Urban Sociolinguistics* Routledge pp. 130-147.